

幕末・明治ロンドン日本人留学生と 日本学生会

——共存同衆への道——

‘The Society of the Japanese students’ in London and ‘The Kiosondoshu Society’ in Japan

井 上 琢 智

Japanese students went overseas to study in the Bakumatu and the Meiji Eras. In July, 1873 there were about eighty Japanese students in England. Tatui Baba tries to bring together those narrow-minded and ignorant Japanese students and form a society named ‘The Society of the Japanese students’ in London in September, 1873. This society was created based on the model of The National Association for the Promotion of Social Science. Baba and other Japanese students often attended its meetings. His experiences there encouraged him to form the Kiosondoshu Society in order to try to educate the mass of the Japanese people and to appeal to their public opinion, with Azusa Ono and others in Japan in September, 1874.

Takutoshi Inoue

JEL : A14, B31

キーワード : 馬場辰猪、イギリス日本人留学生、社会科学振興協会、日本学生会、共存同衆

Key words : Tatui Baba, Japanese students in England, the National Association for the Promotion of Social Science, the Society of the Japanese students, the Kiosondoshu Society

I. 日本学生会の誕生

1871 年から 74 年にかけて、小野梓はアメリカ、イギリスで法理論や政治の実践を学んだが、帰国するやいなや、日本の政治・社会状況を憂い、二つの仕事をした。それが、共存同衆というアソシエーションの結成であり、『羅瑪律要』の邦訳であった¹⁾。前者は彼に「思想生活の根城」を与えただけでなく、「当時の新知識を代表して、天下を風靡」さえした。後者は彼に出世の糸口を与えた。前者は彼が帰国した 1874 年 9 月 20 日であり、後者は、1876 (明治 9) 年であった。

この共存同衆は、西洋の制度・思想・文物の研究という学会のとしての側面をもっていたと同時に、その研究成果を成人教育²⁾を通じて社会に還元し、科学技術ではなく、主として政治・教育・社会経済などの改革をめざすという啓蒙的な実践活動を重視する側面をもあわせもっていた³⁾。この共存同衆の母体となったのが、イギリスのロンドンでほぼ 1 年前に結成されていた日本学生会である。すなわち、1873 年 7 月当時、公費留学生 56 名、私費留学生 24 名の合計 80 名が滞在しており⁴⁾、これら在英日本人渡航者とりわけロンドン在住

1) 同時期に啓蒙団体として結成されていた明六社とこの共存同衆のもつ性格についての比較は、井上琢智「明六社と共存同衆」(柚木学『近代化の諸相—産業経済とその周辺—』清文社、1992)を参照のこと。なお、共存同衆の本格的な研究としては、澤大洋『共存同衆の生成—文明開化と初期都市民権派の知識人言論結社の航跡—』(青山社、1995)および澤大洋『共存同衆の進展と影響』(東海大学出版会、1995)がある。

2) 西村真次『小野梓伝』(復刻版)大空社、1993、81 頁。なお、この邦訳の原本は、オランダのライデン大学教授の J.E.Goudsmit の原典の英訳 R.de Tracy Gould, "A Treatise on Roman Law, and upon its Connection with Modern Legislation" からの重訳であり、これによって小野は 8 月 15 日に司法少丞となり、即日民法課副長に任命され、民法編纂委員を兼ねた (40-42 頁)

3) 石附実『近代日本の海外留学生史』中公文庫、1992、324 頁。

4) 「各国在留公使への示達文」および「海外留学学生改正処分之儀ニ付伺」(国立国会文書所蔵「雑書」2A/35-1/記 412 (前掲書『馬場辰猪全集』第 4 巻、27-33 頁および井上琢智前掲論文「幕末・明治・大正期イギリス日本人留学生資料 (2)」148-50 頁))。なお、「海外留学学生改正処分」によってこれら 80 名の公費留学生のうち継続して留学が認められたものは芳山五郎之介、馬場辰猪、武谷福三、香月経五郎、菊池大麓、丹羽竜之助、岩谷省一のわずか 8 名であった。なお、馬場によれば「此の時分、倫敦には日本の学生が百人程ゐた」と書いている(「馬場辰猪自伝」前掲書『馬場辰猪全集』第 3 巻、73 頁)。

の日本人たちの内、馬場辰猪を中心とする日本人留学生が「日本学生会」と称する組織を結成したのである。馬場は『馬場辰猪自伝』の中で、その理由を次のように指摘している。

「辰猪が社会学促進会 (社会科学振興協会 The National Association for the Promotion of Social Science) の会合に出席して、… 言論の自由は国民の生活の諸方面に非常な利沢をもたらすものなることを思ひ、その会の如きものを日本学生間にも設けることが得策であると考へた」からであつた。この会の目的は、一方で、たしかに日本人留学生間の親睦や相互扶助、さらには英語の訓練という実際上のものであつたが⁵⁾、馬場の意図からすれば、むしろ討論を通じて言論の自由を実践し、体験することであつた。

馬場が日本学生会を結成する契機となつた社会科学振興協会とは、1857年に、有用知識普及協会 (The Society for Deffusion of Usefull Knowlege, 1826-46) や法律改正協会 (The Law Amendment Society, ?-1864) などの運動を通じて、教育・法改革に関心をもつたエディバラ生まれの下院議員であつたブルーム (H.P.Brougham, 1778-1868) やイギリス医療協会の終身会長で下院議員となつたヘイスティング (G.W.Hastings, 1825-1917) らによって、自然科学の研究・啓蒙を中心とする科学促進協会 (The British Association for the Advancement of Science (1831-現在) をモデルとして結成された。この協会は、ビクトリア中期にあつてイギリスが直面していた種々の政治・経済・社会問題等を社会科学の発展と普及とを通じて解決し、社会改良に寄与することを目的としていた⁶⁾。

この日本学生会は、馬場のこの『自伝』によれば、1873年に万里小路通房を議長としてゴールデン・クロス・ホテル (Golden Cross Hotel) で開催された最初の会合で正式に発足する予定であつた。だが、馬場の「日本語でした

5) 「馬場辰猪自伝」前掲書『馬場辰猪全集』第3巻、73頁。また、南条文雄『懐旧録』東洋文庫、平凡社、1979、iii-iv頁。

6) このイギリス社会科学振興協会については、さしあたり井上琢智「イギリス社会科学振興協会 (1857-86) - その歴史 -」(久保芳和博士退職記念出版物刊行委員会『上ヶ原 37 年』創元社、1988) を参照のこと。また、馬場ら日本人留学生のこの協会への出席動向については、井上琢智前掲論文「明六社と共存同衆」(124-127頁) を参照のこと。

最初の演説」後、「会長即ちプレジデントの選挙に就て議論が起つた。一方の人々はプレジデントはこれを日本語に訳すれば大統領であるのだから、そんなエライ名称をば此んな小さい会合で用ゐるべきではないと主張」するなど議論が分かれ、結局まとまらず流会となった。この問題は単に「名称」の問題ではなく、日本学生会という「ソサイエティー」の本質に関わる問題であり、すでに明らかにしたように明治初期の啓蒙団体として著名であった明六社と袂を分かつものであつた⁷⁾。

このように第 1 回の流会により正式に発足しなかった日本人学生会であつたが、その後開催された第 2 回会合で正式に発足したという。その後も、「その問題で学生間には度々議論があつたのであるが、それでも到頭、日本学生会といふ名称の会がたてられ⁸⁾た。ところで問題となるのは、その開催時期である。馬場はこの第 2 回会合で「その時丁度公刊して、ホートン卿に公献した…『日本語文典』を会衆に示した⁹⁾とされることから考えれば、この第二回会合は 1873 年の 10 月以降、年末までの間に開催されたと考えられる。なぜなら、このホートン (Load Houghton, Milnes, R.M., 1809-85) に馬場が紹介されたのは、社会科学振興協会のノリッジ大会においてであり、その開催は 1873 年 10 月 1 日に始まり、8 日に閉会されており、出版されたばかりの *An Elementary Grammar of the Japanese Language* (『日本語文典』1873 年 9

7) 明六社を結成した福澤諭吉とその弟子であつた馬場辰猪とは、本質的に相容れなかったとされる原因の一端をここに垣間見ることができる。たとえば、「馬場と福澤は、当初理想の政治像を共有していたものの、徐々に溝を生じ遂には相容れないものとなって、両者にも一定の距離を生じた。しかし福澤にとって馬場は理想の弟子の一人であり、彼の人格を深く信頼していたため、渡米した後も援助を惜しまなかった」(『福澤諭吉資料館』人物編「馬場辰猪」〈『福澤諭吉著作集』付録)慶応義塾大学出版会、2003)。福澤は「馬場辰猪君八周年祭追弔詞」の中で、馬場の先進性について「自から社会に頭角を現わしたけれども、時勢尚お未だ可ならして君の技倆を実際に試るの機会を得ず」と指摘した(第 5 巻 194 頁)。

8) 「馬場辰猪自伝」前掲書『馬場辰猪全集』第 3 巻、74 頁。なお、同巻所収の「月報 3」掲載の宮村治雄「馬場辰猪における『社会』の原像」(5-8 頁)も参照のこと。

9) 「馬場辰猪自伝」前掲書『馬場辰猪全集』第 3 巻、74-75 頁。なお、この本は、1873 年 9 月に出版された(75 頁)。この日本学生会の結成時期について石附は根拠を明示していないものの「9 月」と書いている(石附実前掲書、323 頁)。

月出版)¹⁰⁾をこの大会中に謹呈したからである。

II. 日本学生会の会員と帰国後の軌跡

このようにして結成された日本学生会の参加者とその活動内容の全容を明らかにする資料は存在しないが、この会に参加した当時の日本人留学生の残した記録から、その一端を明らかにしよう¹¹⁾。

最初に、この日本学生会に明らかに参加していた人物を渡航年順に見てみよう。幕府留学生として第一回目の留学でユニヴァーシティ・カレッジに在籍し、幕府の瓦解で帰国した菊池大麓（渡航期間：1866.10-1868.6、1870-77）は、再び渡英し、ケンブリッジ大学とユニヴァーシティ・カレッジ（1873-77）に在学しており、南条文雄によれば日本学生会の創設者であった¹²⁾。また、三条公恭（渡航期間：1867.3-1872.11.29、1874-）は、第一回目には尾崎三良、大野直輔、沖守固などを同行し渡英、ユニヴァーシティ・カレッジに在籍（1870-71）し、一時帰国したものの、再び渡英し、南条文雄とも交流があった¹³⁾。馬場により創立会議で議長であったとされる万里小路道房（渡航期間：1869.11-74.7.8）は、戊辰の戦功もあって渡航し、帰国後、工部省、宮内庁を経て、貴族院議員となった¹⁴⁾。西川虎之助（渡航期間：1869-1879）は、在籍した学校は不明だが、ロンドンで応用化学を学び、1879年に東京印刷局技師となるために帰国した¹⁵⁾。

1870年代に入ると、馬場辰猪（渡航期間：1870.7.21-74.秋、1875.6.8-78.3.14）

10) 前掲書『馬場辰猪全集』（第1巻、〔英文（以下、同様）〕 pp.3-109）に再録。

11) 以下、井上琢智「日本学生会報告記録」「日本学生会名簿」（前掲書『馬場辰猪全集』第4巻、15-20頁）および澤大洋前掲書『共存同衆の生成』（29-38頁）の記述を参考にした。

12) 南条文雄前掲書、103頁。

13) 南条文雄前掲書、170頁。

14) 「馬場辰猪自伝」前掲書、74頁。万里小路の経歴については『明治維新人名辞典』を参照のこと。

15) 「馬場辰猪日記（Diary）」前掲書、p.217。なお、西川は嘉永7（1854）年広島に生まれ、留学中にロンドンでウインター（K.M.Winter）と結婚していた。1929年1月22日に東京で病死した（芝哲男「明治初期の化学者西川虎之助」『化学史研究』第30巻第2号、2003、109頁、また、芝哲男「明治の化学者の国際結婚」『近畿化学工業界』第50巻第1号、1998、1頁）を参照のこと。

ら日本学生会の実質を担う人々が渡英する。馬場は、真辺戒作、国沢新九郎、深尾貝作、松井正水とともに土佐藩から海軍修行のために明治 3 (1870) 年 7 月 21 日横浜を出航し、ユニヴァーシティ・カレッジで物理学を学んで後、「テンプルやロオヤアス・チェンバアへ通つて、羅馬法、実産法」を学んだ¹⁶⁾。小野梓 (渡航期間: 1871.2-1874.5) は、1871 年春に私費で渡米し、ニューヨークで法律の勉強を始めた。その後、彼は大蔵省の官費留学生に選ばれ、その命により「銀行の事及び其他理財の事を取調ぶる為」に 1873 年 6 月もしくは 7 月にロンドンに移ったところであった。そして同郷 (宿毛) の馬場と相談して日本学生会を結成したのである¹⁷⁾。

明治 3 (1870) 年 11 月、明治政府は海外留学派遣について 15 の大藩に留学生の選抜を依頼した。この選抜に鳥取藩から選抜され、アメリカに留学したのが原六郎 (渡航期間: 1871-77) であった。彼もまたイエール大学に籍を置き、経済学を学んだ。当時、同大学には田尻稻次郎や山川健太郎が学んでおり、ともに学士号を取得した。帰国後「大蔵省の役人になり、財政、経済の方面で国の為に尽し度い希望を持つてゐ」た原は、小野と同様、「恐らく明治 7

16) 萩原延壽『馬場辰猪』中央公論社、1967、28-31 頁。「馬場辰猪自伝」前掲書 71-73 頁。なお、彼の所属した「テンプル」がミドル・テンプルであるか、インナ・テンプルであるかを確定できる資料はないが、前者への日本人留学生についての研究 (島田次郎「ミドル・テンプルと日本人留学生覚書」『中大百年史編纂ニュース』5、1985) には馬場が登場しないことからすると、後者である可能性が高い。馬場のこの法律への関心が、社会科学振興協会への関心となった。その社会科学振興協会のノリッジ大会 (1873 年) で、馬場はホートンの旧友で、小説家・児童文学者・女性解放論者で啓蒙的な経済学者でこの大会に出席していたマルティノー (H. Martineau, 1802-76) の家に招かれた (V. Wheatley, *The Life and Work of Harriet Martineau*, 1957, pp.384-85)。「マルティノー嬢は極く静な老婦人であつた。辰猪が茶の後で、帰らうとすると、嬢は『おやすみなさい』と云つた。嬢が口をきいたのは唯それだけであつた」(「馬場辰猪自伝」前掲書、75 頁)。

また、馬場は、1873 年 5 月 7 日の J.S. ミルの死について「新聞は皆彼の才能のことを書いた。… 人に取つて死後へその著作を遺して行くのは偉大なることであると、辰猪は思つたのだ。人の命は何れ程短かからうとも、その人の為したところのものは後世の記憶に永く遺るであろう。辰猪はジョン・スチュアート・ミルが社会の偏見に対して直裁なる忌憚なき攻撃を加へるその態度に大いに敬服したのであつた」(「馬場辰猪自伝」前掲書『馬場辰猪全集』第 3 巻、75-76 頁)。ミルへのこの評価に、馬場のその後の人生を見ることができる。

17) 『小野梓全集』第 5 巻、早稲田大学出版部、1982、314 頁、559 頁。ここでも、第 1 回の開催月を 9 月としている。

〈1874〉年頃〈15 日以前〉」渡英した。イギリス留学は大蔵官僚となるため重要な要件一つであった。その「当時英国には菊池大麓、馬場辰猪、岩崎小次郎、沖守固、横山孫一郎、蜂須賀茂韶などの連中がいた」。彼はキングス・カレッジで「二年」間「『レヴァン・レーヴキ』氏ニ就キ経済学・社会学ヲ修」めた¹⁸⁾。原は菊池大麓とともに 1877 年 3 月 31 日にロンドンを出発した。伊賀陽太郎（渡航期間：1871.10.11-1881）は、土佐の宿毛の伊賀家の第 12 代で、私費で留学し馬場の「日記」にももつとも多く登場する友人であった¹⁹⁾。松田周次（渡航期間：1871.3.3-1875.9.4）は、ともに大阪時代の何礼之の弟子であった星亨、山田純安、瓜生震らとの交流が深かった²⁰⁾。

長岡護美（渡航期間：1872.1.20-1879.1）は、アメリカ留学（1872-76）をへて、1876 年 1 月にはミドル・テンプルに在籍し、1878 年 7 月 3 日には弁護士資格を取得した²¹⁾。井上十吉（渡航期間：1873.4.24-1883.10）は、ラグビー校、キングス・カレッジ（1879-80）を経て王立鉱山学校に入学し、桜井錠二と交流を深めていた²²⁾。園田孝吉（渡航期間：1874.1.12-1879、1881-88.1、

18) 原邦造編『原六郎翁伝』全 3 巻、私家版、1937、上巻、195-236 頁。なお、本書には 1875 年 6 月 4 日付のキングス・カレッジ夜間部の修了証書、レヴィーからの書簡（1877 年 5 月 5 日）、写真、経歴が採録されている。その後、原は、渡英毎にレヴィーを訪ねている（235-36 頁、1876 年、1886 年の「海外出張日記」（下巻）も参照のこと）。また、同書掲載の「在倫敦本邦留学生の〈帰国〉記念写真（3 月撮影）」（238 頁。なお、この写真は『太陽』第 13 巻第 2 号（1907.2.2）に 1876 年の写真として掲載されている）によれば、原六郎に加えて、南保、長岡護美、菊池大麓、三宮篤胤、伊賀陽太郎、馬場辰猪、瓜生泰、土師某が写っている。この土師とは、海軍省から派遣され、後に横須賀造船所造船科主幹、海軍大技監となった土師外次郎であろう（渡航期間：1871.2-78.6.11）。また、本書には恩師レヴィーのかなり詳細な伝記が *The Story of My Life*（1888：筆者未見）を用いて書かれている。

19) 馬場が二回目の留学期の 1878 年 1 月 7 日に一回目の留学で同僚であった真辺戒作と喧嘩し、馬場は未決監収容所に拘留されたが、その際伊賀は馬場を訪問している。伊賀の訪問の促した馬場の伊賀宛書簡が残されている（この事件および書簡については、前掲書『馬場辰猪全集』（第 3 巻、pp.341-42、155-56 頁、第 4 巻、46-55 頁）。伊賀が日本学生会会員であったことについては、「馬場辰猪日記」（前掲書、p.182）を参照のこと。

20) 野沢雞一編著『星亨とその時代』1、平凡社、1984、93-95 頁。松田が日本学生会会員であったことについては、野沢雞一前掲書（109 頁）を参照のこと。

21) 長岡が日本学生会会員であったことについては、「馬場辰猪日記」（前掲書、p.182）および南条文雄前掲書（116、170 頁）を参照のこと。

22) 井上十吉 “A Few Pages of My Diary,” 『英語の日本』第 9 巻第 1 号、1916、4-5 頁。

1888.5-89) は、大学南校を卒業後、ロンドン万国博覧会出品事務取り扱いとして渡英し滞在、一端帰国したものの再びロンドン領事として赴任した。その後、1881 年には英蘭銀行で業務の研修のため三度渡英し、帰国後、原六郎の後を継いで横浜正金銀行の頭取に就任し、日本銀行にいたイギリス留学経験者で、キングス・カレッジに中上川彦次郎とともに在籍したとされる小泉信吉を本店支配人に招聘し、同銀行の自主的機構の確立に尽力した²³⁾。星亨（渡航期間：1874.10.13-77）は、1874 年 7 月に大蔵省租税寮外事課長となり、翌月条約改正理事官も兼任した。9 月になるとイギリス留学が決定し、12 月ロンドンに着き、ミドル・テンプルへ入学し、日本人最初のバリスターとなった²⁴⁾。

高木兼寛（渡航期間：1875.6.13-1880.11.15）は、鹿児島の開成所から海軍省に勤務し、セント・トーマス病院に留学し、帰国後海軍中医官を経て、東京海軍病院院長となった。その後、成医会講習所（東京慈恵会医科大学）を創立し、院長となった²⁵⁾。以後、慈恵会の医師の高木喜寛、高木兼二、山本景行、同看護婦那須セイ、拝志よしねなどをも病院・看護学校に留学させ、病院・看護学の近代化に貢献した。大越成徳（渡航期間：1876.5-1881、1883.4-1885、1891.3-93〈東京〉）は東京外国語学校仏科を卒業後、外務省に出仕し、1876 年 5 月に外務省書記一等見習として渡英した。その際同船したのが南条文雄と笠原研寿であり、船上で彼らの通訳を務めた。その後、ユニヴァーシティ・カレッジで学んだ²⁶⁾。その南条文雄（渡航期間：1876-1884）と笠原研寿（渡航期間：1876.6.14-1882.9.13）とは、ともに東本願寺から派遣された人物であり、1872 年スイスに渡り、1875 年からロンドンに滞在していた横山孫一郎（-79）から英語を学び、後にサンスクリットを学ぶためにオックスフォード大学（南条：

23) 原邦造編前掲書（中巻）、141-58 頁。『日本近現代人名辞典』584-85 頁。園田が日本学生会会員であったことについては、南条前掲書（176 頁）を参照のこと。なお、中上川がキングス・カレッジのレヴィーのもとで経済学を学んだことについては、日本経営史研究所編『中上川彦次郎伝記資料』東洋経済新報社、1969、45 頁）を参照のこと。

24) 野沢雞一前掲書、93-124 頁。星が日本学生会会員であったことについては、南条前掲書（168 頁）を参照のこと。

25) 佐藤孝卿編『高木兼寛伝』1922（復刻、大空社、1998）6-7 頁。高木が日本学生会会員であったことについては、南条文雄前掲書（103 頁）を参照のこと。

26) 井上琢智「大越成徳と自由貿易」（『経済学論究』第 57 巻第 2 号、2003）を参照のこと。

1879.2.22-84、笠原：1879.10-82.9.13) に在籍し、南条は修士学位を取得した(1884 年)²⁷⁾。

1876 年には文部省の第二回文部省留学生が派遣された。第一回留学生がアメリカ中心であったのが、この第二回はイギリス中心であった。まず、イギリス法を学ぶために星亨、長岡護美に続いて、キングス・カレッジとミドル・テンプルにも在籍したのが、岡村輝彦(渡航期間：1876.6.25-1881.1)、向坂兌(渡航期間：1876.6.25-1881.7)であり、加えてユニヴァーシティ・カレッジにも在籍したのが穂積陳重(渡航期間：1876.6.25-1881.5)であった。彼らはともに弁護士の資格を取得した(岡村：1880.1.26、向坂：1879.6.25、穂積：1879.6.25)。彼らは日本におけるイギリス法の普及と定着に大きな役割を演じた²⁸⁾。

工学を学ぶために留学したの²⁹⁾が、ユニヴァーシティ・カレッジに留学した関谷清景(渡航期間：1876.6.25-1881)であり、化学を学ぶためにサイレンセスター農学校、オウエンズ・カレッジ、サウス・ケンジントン化学学校、ユニヴァーシティ・カレッジとに学んだ杉浦重剛(渡航期間：1876.6.25-1880.5.18)であり、ユニヴァーシティ・カレッジに止まった桜井錠二(渡航期間：1876.6.25-1881.9)³⁰⁾である。桜井はこのロンドン時代にイギリス人化学者とのネットワークを築き、帰国後も彼らと交流した³¹⁾。

在英の後半に、マンチェスターに繊維工業の実習のためにマンチェスターに滞在(1879.8.2-80.5)したものの、ユニヴァーシティ・カレッジで W.S. ジェヴォンズから経済学を学び、その講義ノートを残した山辺丈夫(渡航期間：

27) 南条文雄前掲書、175 頁。

28) 穂積、岡村、向坂が日本学生会会員であったことについては、南条文雄前掲書(103、170 頁)を参照のこと。なお、「穂積陳重先生の渡英日記」『書斎の窓』(第 27 巻第 33 号、1955、12 頁)を参照のこと。

29) 同時にこの第二回留学生には、ロンドンに留まらず、グラスゴウ大学に留学した増田礼作(1876.6.25-81)と谷口直貞(1876.6.25-81)がいる。

31) 菊池好行「桜井錠二とイギリス化学者ネットワーク」『化学史研究』第 3 巻第 2 号、2003、111 頁。同論文によると、桜井と東京開成学校時代の師 R.W. アトキンソン、東京帝国大学化学科での同僚 D. ダイヴァース、ユニヴァーシティ・カレッジ大学時代の師 A.W. ウィリアムソン、ウィリアムソンの後任 W. ラムジ、F.G. ドナンなどとの交流書簡が残されているという。

1877.10-1880.5) は、キングス・カレッジにも在籍していた。彼は「所論の穩健なるを以て会衆から敬意を払われた」³²⁾という。また、イギリス駐在日本公使館の一等書記として渡英した末松謙澄(渡航期間:1878-1886)は、ユニヴァーシティ・カレッジからケンブリッジ大学(1881-84)で学び、最終的に LL.B. の学位を取得した³³⁾。藩の貢進生として大学南校で杉浦重剛、穂積陳重と同級生であった河上謹一(渡航期間:1879.5.17-1882.8)は、1878 年東京帝国大学法科大学を卒業した「日本最初の法学士」として、第三回文部省留学生として、1879 年渡英し、ユニヴァーシティ・カレッジに在籍し、W.S. ジェヴォンズから経済学を学んだ³⁴⁾。増島六一郎(渡航期間:1879-1884)は、1879 年に河上と同様東京帝国大学法科大学を卒業し、私費留学生となり渡英し、ミドル・テンプルで法学を学び(1881.1.29-83.6.6)、弁護士資格を取得し、帰国後、岡村輝彦、土方寧らとともに、英吉利法律学校(中央大学)を創立し、初代校長となった³⁵⁾。実吉安純(渡航期間:1879.7.26-1885.9.22)は、東京の大学病院などで研修し、海軍医官となり、渡英。帰国後、海軍軍医学校校長、医務局長などをへて、貴族院議員となる。1920 年には東京慈恵会医院医学専門学校校長となった³⁶⁾。また、1886 年 4 月 17 日に領事園田孝吉同席の中「海軍拡張について」報告したロンドン公使館書記生であった中田敬義³⁷⁾がいる。

32) 石川安次郎『狐山の片影』私家版、1923、104 頁。

33) 末松が日本学生会会員であったことについては、南条文雄前掲書(169 頁)を参照のこと。

34) 石川安次郎前掲書、104-5 頁。なお、貢進生については唐沢富太郎『貢進生—幕末維新期のエリート—』(ぎょうせい、1973)を参照のこと。その他、この第三回文部省留学生でイギリスへ留学したのは、化学を学ぶため杉浦重剛に続いてオウエンズ・カレッジへ留学した高松豊吉(1879-82)と工学を学ぶためにロンドン・エドワード・イーストン工場で実習した石黒五十二(1879.5-83)がいる。河上謹一の甥で、この渡英の年に生まれたのが河上肇である。

35) 増島が日本学生会会員であったことについては、南条文雄前掲書(169 頁)を参照のこと。

36) 南条文雄前掲書、iii 頁。

37) 前掲書『原六郎伝』(下巻)70 頁。それによると「此の夜(1886 年 4 月 17 日八時より Charendon Hotel の日本人会に出席す」と書かれている。この「日本人会」が「日本学生会」であるとの確実な証拠はないが、少なくとも今日なお存続する日本協会の設立が 1891 年 9 月であることから考えると、この日本協会ではないと考えられる(サー・ヒュー・コータッツィ、ゴードン・ダニエルズ編『英国と日本—架橋の人びと—』大山瑞代訳、思文閣出版、1998、10 頁)。もっとも、馬場もこの日本学生会を「日本人会」と呼んでいる(注 47 を参照のこと)こともあり、ここでは一応「日本学生会」と考えて紹介しておきたい。なお、石川出身のこの中田は、『外務省職員

また、その経歴について詳細は不明であるが、南条が漢詩二作を送った三田菱雲がいる³⁸⁾。

共存同衆の会員となった人物の中で、当時イギリスに滞在していた人物を渡航順に挙げてみよう³⁹⁾。彼らもまた日本学生会会員であった可能性がある。

矢嶋作郎（渡航期間：1868-74）、福原芳山（渡航期間：1867.7-74.8）、尾崎三良（渡航期間：1868.3-73.10）、狛林之助（渡航期間：1868.3-73）、国沢新九郎（1870.7.21-74）、岩崎小次郎（渡航期間：1870.11-1874）、高良二（渡航期間：1870-74）、内藤類次郎（渡航期間：1870-74）、土山盛有（渡航期間：1871.1.2-1873.12.15）、吉井茂則（渡航期間：1871.2-74.6.25）、高原弘造（渡航期間：1871.3.3-1875）、豊原百太郎（渡航期間：1871.4-74）、横尾平太（渡航期間：1871.9.10-1874）、岩崎小次郎（渡航期間：1871.11-74）、石野基将（渡航期間：1871-？）、岡林篤馬（渡航期間：1871-74）、何礼之（渡航期間：1871.12.23-73.7.23）、赤松連城（渡航期間：1872.1.27-74.8.20）、堀川教阿（渡航期間：1872.1.27-74）、河鰭実文（渡航期間：1873.1.27-73.12.2）、岡部長職（渡航期間：1875.10-83.10）、南保（渡航期間：1875-81）、磯野計（渡航期間：1880-85）、山下雄太郎（渡航期間：イギリス・フランス・ドイツ・オランダ 1880.10-84.3）、国府寺新作（渡航期間：1881-85）、大石正己（渡航期間：

録』「1886年2月1日調」に初出し、「90年1月25日調」まで、書記生として記録されている（井上琢智前掲資料「幕末・明治・大正期イギリス日本人留学生資料」（2）、139-40頁。なお井上琢智前掲論文「日本学生会報告記録」の田中敬義は中田敬義の誤りである）。彼の経歴の詳細は不明であるが、フォーセット（H.Fawcett）の *Manual of Political Economy*（1863）の漢訳を岸田吟香が訓点を付した『富国論』（1881）を校訂したり（堀経夫『増訂版 明治経済思想史』日本経済評論社、1991、46頁）、訳書『北京官話伊蘇普（イソップ）喩言』（1879）を出版している。それによると、中田は金沢藩はら東京に派遣され中国語を学び、1876年に外務省から北京に派遣されている（三橋猛雄『明治前期思想史文献』明治堂書店、1976、372頁）。

38) 南条文雄前掲書、134頁。

39) 澤大洋前掲書「共存同衆の会衆員略歴名簿」（177-204頁）に掲げられた会員で1870年代から80年代にかけてイギリスに渡航していた人物を手塚晃・石島利男共編前掲『幕末明治期海外渡航者人物情報辞典』から抽出した結果である。ただし、一年間前後の短期間にヨーロッパ各国を視察した場合は取り上げていない。なお、上記文献以外で各留学生の略歴で使用した文献は以下の通りである。磯野計（井上十吉前掲論文、4-5頁、『金井延の生涯と学蹟』日本評論社、1939、306頁）、岩崎小次郎（『日本人名大事典』）、横山孫一郎（南条文雄前掲書、100-01頁）。

1886-87) である。

ところで、共存同衆の創立者で最初の会合の参加者が、万里小路道房、岩崎小次郎、尾崎三良、大内青巒、広瀬進一、赤松連城、小野梓だとすると⁴⁰⁾、その中でイギリスへの留学経験がないために、日本学生会にかかわりをもてなかったのは、大内青巒、広瀬進一に過ぎない。したがって、これらのメンバーの中で、その滞在時期から考えて、もっとも日本学生会へ参加している可能性が高いのは岩崎小次郎と赤松連城である。岩崎は長崎県出身で民部官に出仕し、黒田清隆の侍従として欧州を巡回し、イギリスに留まった。帰国後大蔵省に勤め、松方財政の片腕となり、共存同衆結成メンバーとなった。赤松は西本願寺から堀川教阿とともに派遣され、帰国後、宗門教育の改革を唱え、実行した。尾崎三良は日本学生会結成の前後である 1873 年 9 月に帰国している。

その他、一般の会員の帰国後の経歴は以下のようである。矢嶋作郎は帰国後大蔵省紙幣寮助から実業界に転じ、東京貯蓄銀行、東京電灯会社などを設立、衆議院議員となった。福原芳山は帰国後司法省に出仕し、後大阪裁判所判事となった。粕林之助は工部省鉱山寮へ出仕し、佐渡鉱山局長心得となった。馬場らとともに土佐藩の留学生の一人であった国沢新九郎は、ロンドンで洋画を研究、帰国後画塾を設立し、近代の洋画の発展に尽くした。高良二は大阪開成学校や大阪英語学校の校長を務めた。内藤類次郎は帰国後工部省工学寮から外務省へ移り、外務省記録局次長となった。土山盛有は帰国後大蔵省へ出仕し、大蔵権大書記官などを務めた。吉井茂則は帰国後逓信技師兼鉄道技師となった。高原弘造は、帰国後工部省へ出仕し、二本土木会社技師長となった。豊原百太郎は帰国後大蔵省造幣寮へ出仕し、造幣少技師、札幌農学校教授となった。横尾平太は、帰国後大蔵省審査課長、函館・新潟税関局長を務めた。石野基将は森有礼の渡米に際して同行（1870）して後、太政官の官費生となり渡英、帰国後（1874）工部省御用掛（1883）を務めたが詳細は不明である。岡林篤馬は大蔵省より渡航を命ぜられ、豊原百太郎、正木退蔵らと渡英（1871）し、造幣のための化学を学ぶことになっていたが、その後の詳細は不明である。何礼

40) 澤大洋前掲書、48 頁。

之は星亨、松田周次などの大阪時代の恩師であるので、この日本学生会にかかわった可能性が高い。堀川教阿は赤松蓮城とともに西本願寺から派遣され渡英（1872.1.27）したが、帰国（1874）後西本願寺派僧侶となったが、詳細は不明である。河鱒実文は帰国後内務省少書記官をへて、貴族院議員となった。岡部長職は外務次官、貴族院議員、東京府知事、司法大臣、枢密院顧問官となった。南保は帰国後大蔵省租税寮へ出仕し、農商務省権大書記官兼商務局長心得となった。磯野計は1879（明治12）年東京大学卒業後ただちに渡英し、85年に帰国。のちに明治屋を創業した。山下雄太郎は、大阪控訴院検事となり、後に弁護士となった。国府寺新作は帰国後東京師範学校教諭、高等商業学校教授をへて、外務省翻訳課長事務取扱となった。大石正己は農商務次官、農商務大臣、衆議院議員を務めた。

これらに加えて、すでに指摘したユニヴァーシティ・カレッジに在籍した市川盛三太郎（渡航期間：1866.10-1868、1877.5-79）、造船学を学び横須賀造船所の経営に寄与した佐双佐仲（渡航期間：1870-77）、刑部省より派遣され帰国後内務省勸農局農学課長となった富田貞次郎（渡航期間：1871-74、1876）、岩倉使節団に随行後、私費留学し、帰国後外務少書記をへて元老院議官、貴族院議員となった沖守固（渡航期間：1871.12-1878.1）、工部省鉄道寮からユニヴァーシティ・カレッジに留学、帰国後高島炭鉱長崎支店長、三菱本社営業部長などを務めた瓜生震、オックスフォード大学に留学し、帰国後外務省御用係をへて貴族院議長、文部大臣、枢密院顧問となった蜂須賀茂韶（渡航期間：1872.1-1879.1）、工部省留学生で、帰国後工部省測量正、少書記官をへて工部大学校幹事となった富田孟次郎（河野〈越智〉通信：渡航期間：1873.3-74.10）、原六郎とともにL. レヴィーのもとで学び⁴¹⁾、帰国後山口県や福島県の知事になった原保太郎（渡航期間：1871〈アメリカ〉-74〈イギリス〉-76）、ロンドン領事南保（渡航期間：1875-?）、大倉組ロンドン支店長で南条に英語を教え、帝国ホテル取締役、日本製糸株式会社社長となった横山孫一郎（渡航期間：1875-79）らが日本学生会に参加していた可能性がある。

41) 前掲書『原六郎翁伝』（下巻）338頁。

III. 日本学生会活動－報告・討論のテーマ－

それでは、日本学生会ではどのようなテーマが報告・討論されたであろうか。日本学生会が正式に創立された第二回会合では、すでに指摘したように馬場辰猪が自書の *An Elementary Grammar of the Japanese Language* を紹介した。この第二回会合以降のテーマを追ってみよう。

1875 年 6 月 19 日（土曜日）には、馬場が “On the Condition of Japan & the Condition of Japanese Women” を報告した⁴²⁾。このテーマが選ばれた背景の一つとして考えられるのは、女性の会員を正式に認め、女性の副会長を擁し、女性問題に積極的に取り組んでいた社会科学振興協会⁴³⁾への馬場の積極的参加があったからであろう。1875 年 9 月 25 日（土曜日）にベッドフォード・ホテル（Bedford Hotel）で開催された会合では、当時ケンブリッジ大学に在学していた菊池大麓が “On the University of Cambridge” というタイトルで報告した⁴⁴⁾。また、10 月 29 日（金曜日）には上田敏の父乙骨太郎乙と乙骨亘の弟でユニヴァーシティ・カレッジに在籍していた乙骨兼三が “On Geology”⁴⁵⁾を、12 月 27 日（月曜日）にはアメリカ留学を経て渡英し、ミドル・テンプルに弁護士資格取得のために渡英してきた長岡護美が “Tour on the Continent” をそれぞれ報告した⁴⁶⁾。1876 年 11 月 25 日には馬場が「土佐日記の論文」を報告している⁴⁷⁾。

1877 年 1 月 27 日（土曜日）には、1876 年からユニヴァーシティ・カレッジに在籍していた関谷清景が “On the Roads of Japanese Cities and their Constractive Details” を報告した⁴⁸⁾。2 月 3 日（土曜日）には報告者、タイ

42) 「馬場辰猪日記」前掲書『馬場辰猪全集』第 3 巻、p.182。

43) 井上琢智前掲論文「イギリス社会科学振興協会とヴィクトリア中期の女性問題－NAPSS (1857-1866) の『会報』を中心にして－」（『大阪女学院短期大学紀要』第 18 号、1987、59-88 頁）を参照のこと。

44) 「馬場辰猪日記」前掲書『馬場辰猪全集』第 3 巻、p.191。

45) 「馬場辰猪日記」前掲書『馬場辰猪全集』第 3 巻、p.194。

46) 「馬場辰猪日記」前掲書『馬場辰猪全集』第 3 巻、p.199。

47) 「馬場辰猪日記」前掲書『馬場辰猪全集』第 3 巻、104 頁。なお、この論文は「日本人会に於てなり」と書かれている（本章注 109 を参照のこと）。

48) 「馬場辰猪日記」前掲書『馬場辰猪全集』第 3 巻、p.205。

ドルともに不明ではあるが、チャリング・クロス停車場前にあったカレドニアン・ホテル (Caledonian Hotel)⁴⁹⁾で会合がもたれているし、同ホテルでは3月3日にイエール大学を経て渡英し、少なくとも1877年3月3日には、キングス・カレッジのレヴィーのもとで学んでいた原六郎が“On Coinage”を報告した⁵⁰⁾。また、3月もしくは4月に予定されていたものの中止となった会合では、前年11月に渡英しキングス・カレッジとミドル・テンプルに在籍していた向坂兌が報告することになっていた⁵¹⁾。4月21日(日曜日)にはすでに1869年から渡英して79年まで滞在していた西川虎之助が“On Ice”を⁵²⁾、5月26日(日曜日)には、ミドル・テンプルとキングス・カレッジに在籍していた入江陳重(穂積陳重)が“On Federal System”を報告した⁵³⁾。彼は1879年6月に弁護士の資格を取得した後、1878年から翌年にかけてユニヴァーシティ・カレッジにも在籍していた。9月29日には馬場が“Genji Monogarari”を報告した⁵⁴⁾。この年には、この他、11月30日、12月15日にも会合がもたれたと思われるが、詳細は不明である⁵⁵⁾。そして記録を再び辿ることのできるのは1882年以降である。

1882年には、1月14日に会合がもたれ、1873年からパブリック・スクールであるラクビー・スクールに在籍し、1879年からキングス・カレッジに在籍していた井上十吉を含む22名の参加があつたが、報告者・タイトルともに不明である⁵⁶⁾。同月28日にはユニヴァーシティ・カレッジで経済学を学んで

49) 「馬場辰猪日記」前掲書『馬場辰猪全集』第3巻、p.206。このホテルはチャリング・クロス駅前にあつた(石川安次郎『孤山の片影』(私家版、1923、103頁)。

50) 「馬場辰猪日記」前掲書『馬場辰猪全集』第3巻、p.210。1875年7月14日には原は「3, St. George's Square, Princes Hill, London, N.H.」に住んでいた(前掲書『原六郎伝』上巻、226頁)。

51) 「馬場辰猪日記」前掲書『馬場辰猪全集』第3巻、p.212。

52) 「馬場辰猪日記」前掲書『馬場辰猪全集』第3巻、p.217。

53) 「馬場辰猪日記」前掲書『馬場辰猪全集』第3巻、p.221。

54) 「馬場辰猪日記」前掲書『馬場辰猪全集』第3巻、p.233。

55) 「馬場辰猪日記」前掲書『馬場辰猪全集』第3巻、p.239, p.241。馬場は長岡へ健康を害しているために会には出席できない旨の書簡を送っている。

56) 井上十吉前掲論文、4-5頁。

帰国した後、再び外務書記生として再び渡英した大越成徳⁵⁷⁾が帰国に際して講演を行い、河上謹一、井上十吉らが参加した⁵⁸⁾。1883 年 7 月 29 日には、1879 年からオックスフォードに留学していた南条文雄の送別の宴がもたれたもの、彼の帰国延期によって 1884 年 3 月末に改めて南条の送別の宴がもたれ、会員十数名の参加の他、イギリス領事園田孝吉も同席した。これは南条が修士号を取得し、1884 年 3 月 18 日の学位授与式に出席していることから考えれば、その出席のためもあって、帰国を遅らしたのとも考えられる⁵⁹⁾。また、すでに指摘したことではあるが、1886 年 4 月 17 日にチャレンドン・ホテル (Charendon Hotel) で開催された会合では、ロンドン公使館書記の中田敬義が「海軍拡張について」を報告したが、その席に園田も出席していた。

その他、開催日時の不明な報告の中には、星亨と馬場との間で戦われた「日露開戦について」(1875 年 9 月)⁶⁰⁾、南条文雄が「仏教の大意-三世因果問題」「真宗の教旨」「頼三陽」「印度の論理学である因明」(1876 年 8 月～1884 年)を報告しているし、その南条の「頼山陽」の報告に続いて末松謙澄が「頼山陽逸話」を話した。また、笠原研寿は「仏教は一神教なりや多神教なりや」を報告している⁶¹⁾。

南条文雄によれば、この日本学生会は「毎月第二第四の土曜日」で「一回は討論会、一回は演説会」として、もしくは「毎日曜」開催され、その「講演には一度は練習のために英語で話し、一度は日本語で話すことに」なっており、その場所は、ベッドフォード・ホテルやカレドニアン・ホテルさらには杉浦重剛宅で開催されていた⁶²⁾。その報告の内容を見る限り、日本学生会の初期に

57) ただし、大越成徳が再び渡英したのは、1883 年 4 月とされる。この日付が正しいとするとこの日本学生会での講演はできないことになる。ただし、彼のこの渡英が結婚のためであることから考えれば、公式な外務書記生としての就任が 1883 年 4 月である可能性がある。

58) 井上十吉前掲論文、4-5 頁。

59) 南条文雄前掲書、161、175-76 頁。

60) 野沢雞一前掲書、109 頁。松田はこの議論が「予の倫敦出立する日かまた前日」になされたと書いている。彼の帰国時期が 9 月 4 日 (手塚晃・石島利男共編前掲『幕末明治期海外渡航者人物情報辞典』) であるとされていることからすると、9 月 3 日もしくは 4 日にこの議論がなされたということになる。

61) 南条文雄前掲書、104、107-10 頁。

62) 南条文雄前掲書、103、107 頁。その時期は杉浦のロンドン到着 (1876 年 8 月) からオック

は、イギリスを中心とするヨーロッパ文化紹介とともに馬場の報告に見られるように日本文化の紹介や現状が報告されている。まさに、1881年9月に帰国した桜井錠二が指摘するように「時代精神とイギリスの国民的教養に触れつつ新日本の文化建設を心に潜め、一意精進の道を励んだのがすなわち当時の日本学生会諸君であった」⁶³⁾。しかし、1880年代になると、日本学生会は初期の目的を失い、親睦会の様相を呈してきた。というのは、この会のリーダーであった馬場辰猪⁶⁴⁾が1878年3月14日にロンドンを離れたからである⁶⁵⁾。それとは逆に、彼の帰国によって、この日本学生会を母体にして日本で誕生していた共存同衆の活動は活発になっていった。

IV. おわりに

このように馬場たちのイギリス社会科学振興協会への参加を契機として結成された日本学生会がその活動内容や報告内容からして、未だ当時のイギリス社会科学振興協会のように充実したものとはならなかったにせよ、日本での共存同衆の組織と運営とを実現するための準備組織となったことは確かである。例えば、この社会科学振興協会の「常会」へ参加した最初の日本人は、1871年12月2日に参加した川北義次郎(1844-1891、滞在期間：1867-73)⁶⁶⁾と芳山五郎之介(生没年不明、滞在期間：1870-?)である。川北は松下村塾で学び、1872年イギリス公使館御用掛となり、大蔵省心得としてロンドンでのポンド債募集に従事した。同年彼はこの協会の正式会員となっている。これらの二人

スフォードへ行った79年2月27日までであろう。当時杉浦は入江(穂積)陳重と河上謹一とともにユーストン・ロード・スタンホープ街190番地に住んでいた。また石川安次郎前掲書(103-4頁)も参照のこと。

63) 南条文雄前掲書、vi頁。

64) 例えば、長岡護美は「留学中にて学者として一番に指を屈せらるるは菊池、星、馬場の三氏なりき。すなわち博学家としては馬場氏を推し、法学家としては星氏を推し、真面目の学者としては菊池氏を推したるなり」と述懐している(野沢雛一前掲書、110頁)。

65) 萩原延壽前掲書、77頁。

66) 北川とともに松下村塾に学び1867年にアメリカ、イギリスへ渡った天野清三郎(渡辺蒿蔵)は、1874年に帰国し、工部省に出仕し、長崎造船所長、工部省技師となった。芳山については現在のところほとんど情報がない。

は、帰国後、共存同衆の会員にはならなかったものの、1879 年 3 月 10 日までにこの「常会」出席していた馬場辰猪（12 回）、原六郎（8 回）、長岡護美（2 回）、伊賀陽太郎（1 回）、真辺戒作（1 回）、石野基将（1 回）、向坂兌（1 回）、三条公恭の侍従（2 回）のうち、馬場をはじめ原、長岡、石野は共存同衆の会員となった⁶⁷⁾。

彼らが出席した「常会」のテーマから彼らの関心を想定することが可能であろう。馬場は「株式会社のための国際規約設立の便宜について」（1873 年 2 月 24 日）、「裁判制度の再組織について」（1873 年 3 月 3 日）、「法典は摘要か」

（1873 年 4 月 21 日）、「海上生活にとっての法的安全性」（1873 年 5 月 5 日）、「インドにおける人命と財産の破壊について」（1873 年 5 月 19 日）、「慈善施設の受益者の選別方式について」（1873 年 12 月 1 日）、「地方税と地方政府」（1874 年 1 月 12 日）、「陰謀律とその近代への応用」（1874 年 1 月 26 日）、「ロンドンの統治」（1874 年 2 月 2 日）、「学校衛生」（1874 年 2 月 24 日）、「負債による投獄の廃止について」（187 月 6 月 1 日）、「法曹界に役立つ諸研究」（1875 年 11 月 15 日）の報告・討議とを聞いている。このテーマのうち「負債による投獄の廃止について」を報告したのは、日本人留学生がキングス・カレッジでお世話になったレヴィーの報告であった⁶⁸⁾。

さらに、1875 年 10 月 8 日のブライトン大会では、原が「日本における領事裁判の状況」の中で、不平等条約下における裁判の不平等さを指摘し、これが解決しない限り「日本がイギリスとの貿易を拡大することは不可能である」と主張し、自由貿易実現の前提として不平等条約の撤廃を主張し、馬場もそれに発言をするなど、より日本人留学生は積極的に参加していった。

このようにして、日本学生会の会員は、単に机上の学問だけでなく、まさに

67) 宮村治雄前掲論文、6 頁。なお、宮村の挙げる長岡護良は長岡護美のことであり、その他不明者とされている M.Nooshi Sagisaka は向坂兌^{ナオン}であり、Mr.Jiju Sanjo は三条公恭の従者だとすれば、中御門寛丸、城蓮、毛利平六郎、森寺広三郎、大野直輔、尾崎三良らが考えられるが、当時の留学生の関心とその後の行動から考えると、森寺広三郎もしくは尾崎三良がもっとも該当する考えられる人物である。

68) 宮村治雄前掲論文（6 頁）およびその研究の原資料となった *Sessional Proceedings of the National Association for the Promotion of Social Science, 1863-83* である。

当時のイギリスにおいて改革が求められていた各種の分野での問題点とそれをめぐる論争に接することとなった。この経験こそが、帰国後の共存同衆の結成・組織・運営などに大きく影響したのである⁶⁹⁾。

69) 原と馬場の大会での報告や共存同衆の組織・運営と社会科学振興協会のそれとの類似性の指摘については、井上琢智前掲論文「明六社と共存同衆」を参照のこと。また、前掲書『馬場辰猪全集』第4巻(24-26頁)を参照のこと。